

I. 外観

3×3間構造。かやぶき屋根から現在は瓦屋根へ。



II. 薬師堂の外部

・向拝部



中備は『竹に虎』（とら薬師と呼ばれるそうです）。その下の虹梁両脇には鯖尻の跳ね返りがあります。

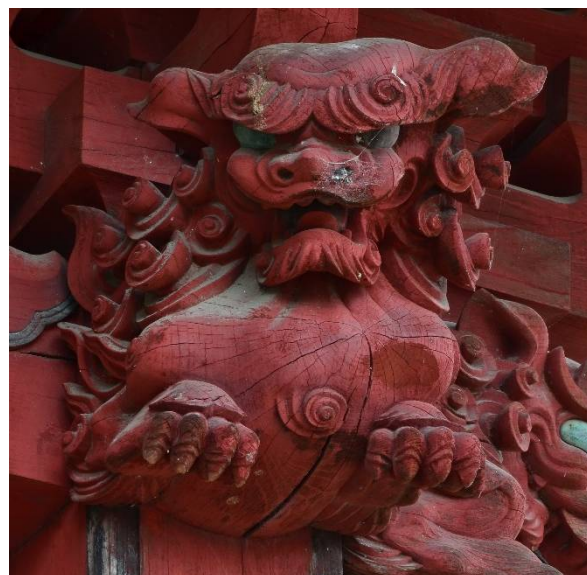
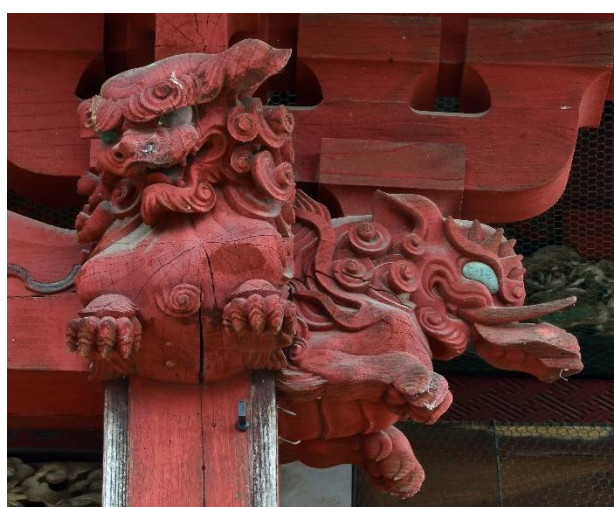




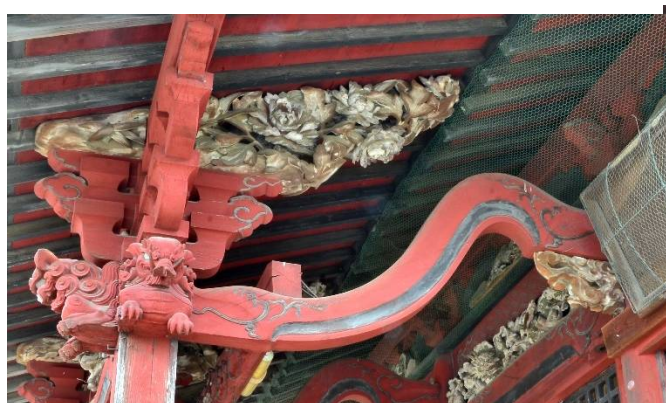
虎の目ですが、銅版がはめ込まれています。固定の釘の頭が確認できます。経年による酸化で緑色になっていますが、元は金色であったと思われます。



・木鼻 正面『獅子』(左 吽形、右 阿形)、側方『猊』(左 吽形、右 阿形)



・海老虹梁と手挟み『牡丹』



海老虹梁のカーブ（そり）はかなりあります。母屋側の持ち送りは『瑞雲』で、虹梁の端には鯖尻の跳ね返りがあります。



手挟み 『牡丹』
右)

上部から、蕾、半開、満開になっています。



左)



・母屋向拝後部の羽目彫刻『龍』



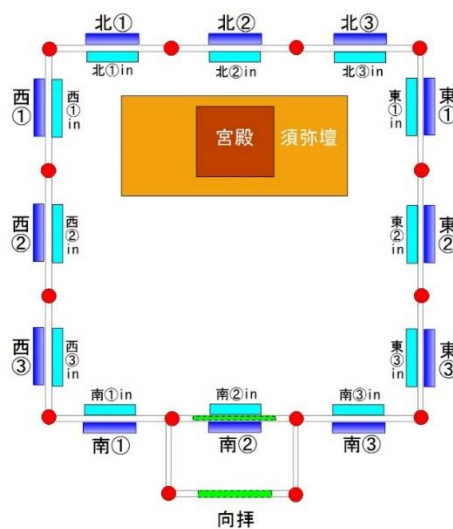
龍の上部は地紋彫り「紗綾形（卍くずし、卍つなぎ）」、下部の虹梁の端には鯖尻の跳ね返りがあります。



・母屋正面上部 千鳥破風の奥の羽目『波に瑞雲』、彫が平面的で後補か？



・母屋の外部 軒下の幕股 『十二支』 3×4面になっています。東①～北③まで。



手前から東①から東③

下部の梁には、地紋彫「紗綾形」

◆東面

幕股（東①）

『竹に虎』



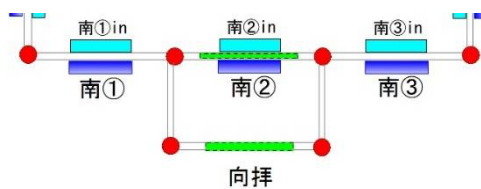
臺股（東②）
『波に卯』



臺股（東③）
『雲に辰』



◆南面（正面）



臺股（南③）
『蓮に巳』



臺股（南②）
『蒲公英に午』



臺股（南①）
『唐松に未』



◆西面



臺股（西③）
『桃に申』



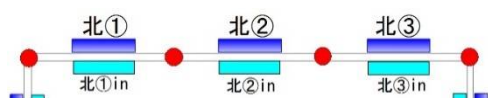
墓股（西②）
『口に酉』



墓股（西①）
『口に戌』



◆北面（後面）



墓股（北①）
『大和松に亥』



墓股（北②）
『米俵に子』



墓股（北③）
『口に丑』



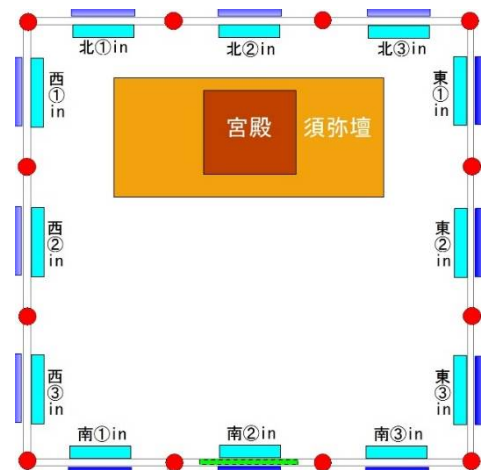
Ⅲ. 薬師堂の内部

中央に護摩壇、その後方に須弥壇があります。
内部の壁上にも、墓股があり

東①in から北③in まで

モチーフは

植物で、薬草として利用された植物を使った
のではないかと思います。



臺股（東①in）
植物『？』



臺股（東②in）
『芙蓉』？



臺股（東③in）
『菊』
生薬：菊花



臺股（南③in）
『沢瀉』
生薬：タクシヤ
水滯をとる



臺股（南②in）
『河骨』



臺股（南①in）
『桔梗』
扁桃炎に使用



臺股（西③in）
『木槿 ムクゲ?』



臺股（西②in）
『?』 水草か



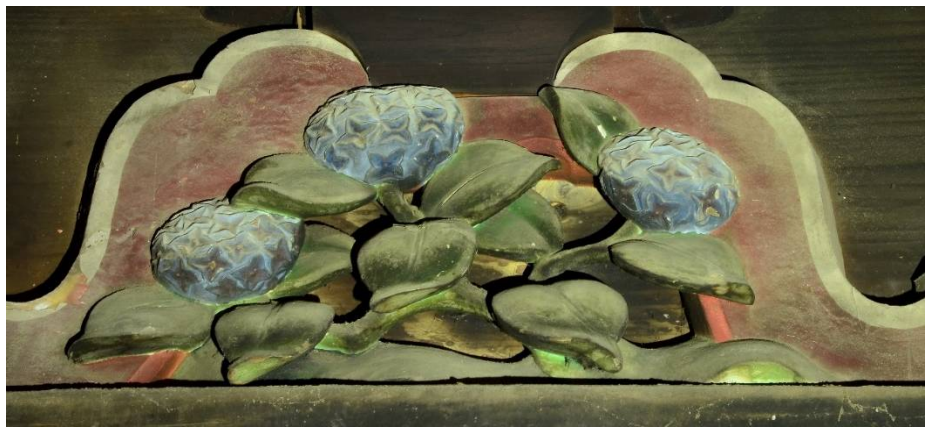
臺股（西①in）

『？』



臺股（北①in）

『紫陽花』アジサイ
現在は有毒とされ
使用されず



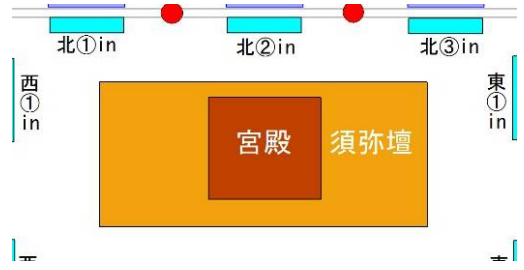
臺股（北②in） 写真なし 現在 宮殿の裏に移動

臺股（北③in）

『ツバキ？』



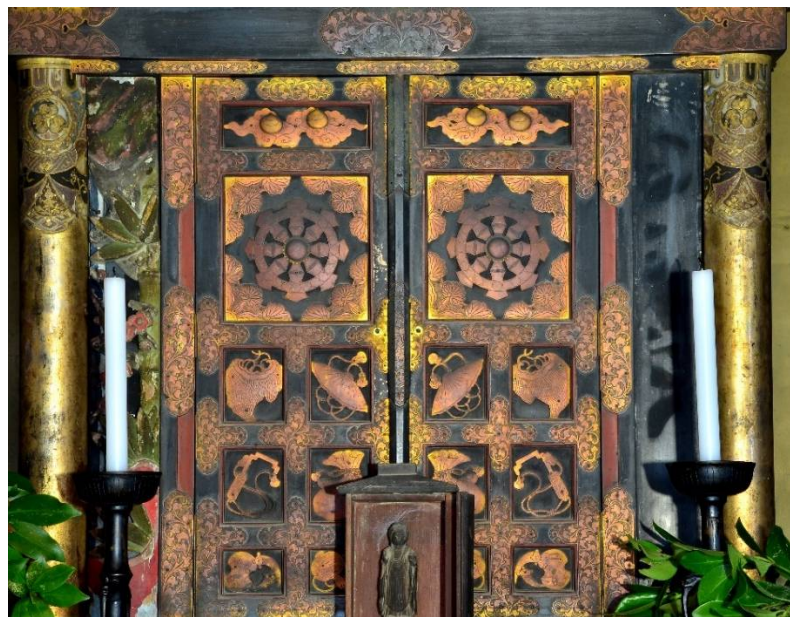
Ⅲ. 須弥壇と宮殿



宮殿上部



宮殿扉 『法輪』他、脇の方立『竹、梅』

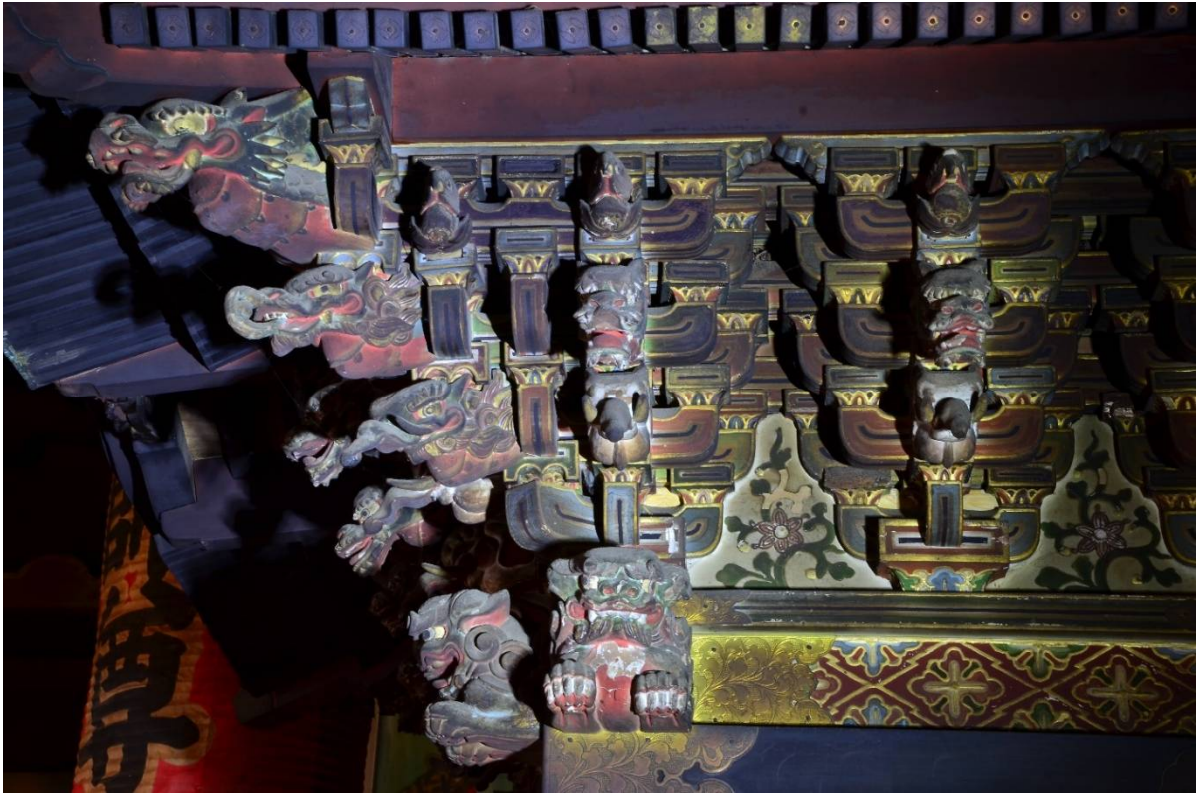


宮殿 兔毛通（懸魚）『飛龍』懸魚、奥の羽目（破風入り）『郭巨（二十四孝）』か下部の虹梁も鯖尻の跳ね返りがあります。



・軒下の組 『龍』『蜃』『獺』『鳳凰頭』『象』『獅子』





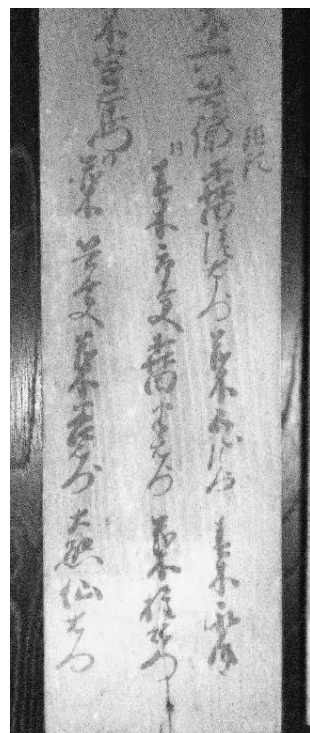
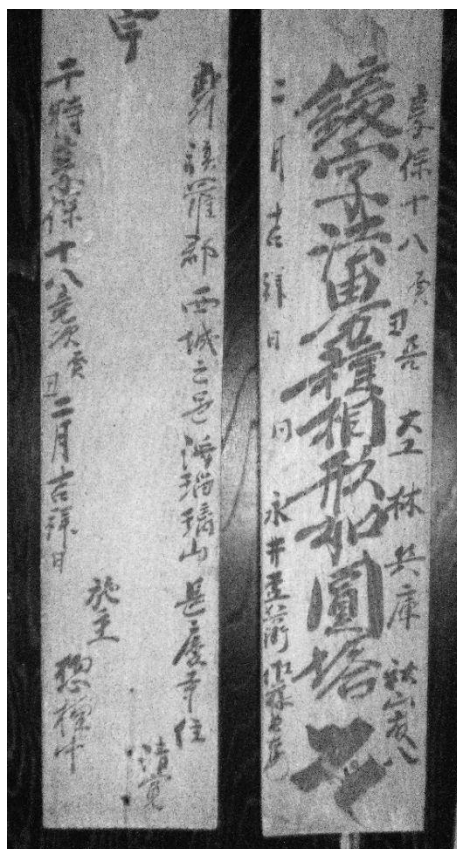
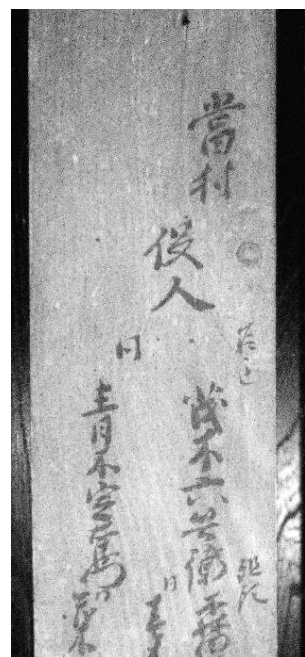
・須弥壇

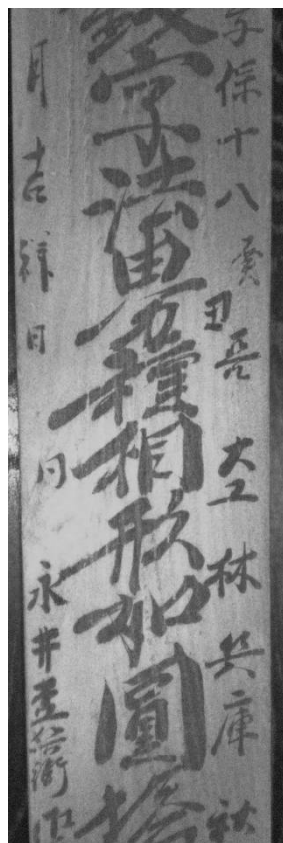
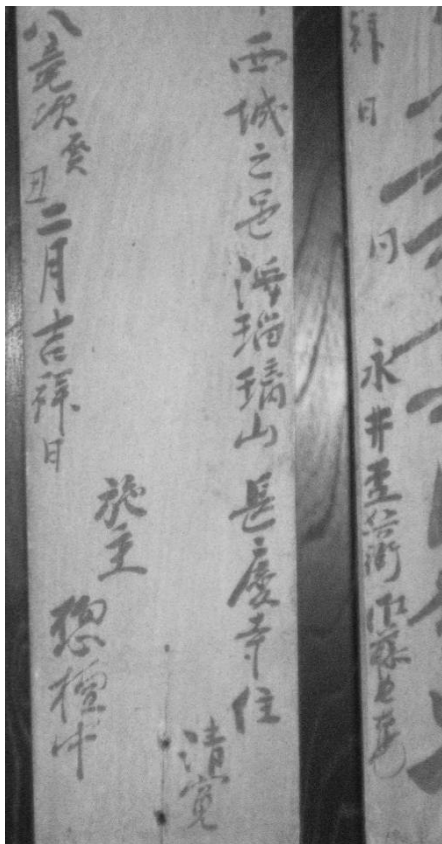
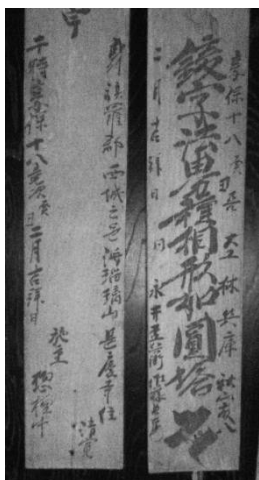
蕨手には『蓮』の細工。土台部の羽目（外れています）には『波に犀』



IV・基礎的資料（棟札、墨書）

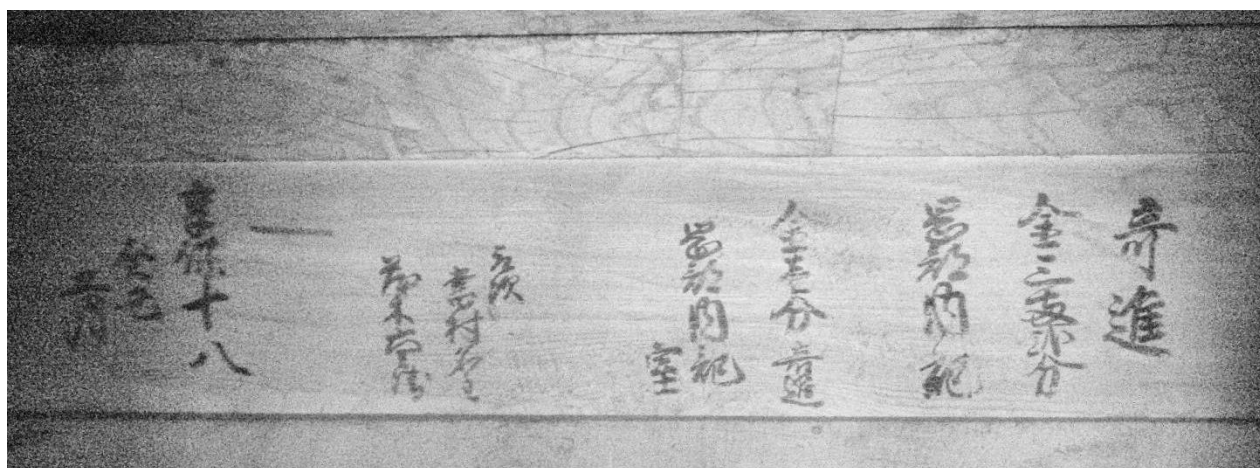
1. 棟札（天井部）資料①・・・建立時2枚
（他に2枚あり、安永八年と大正八年）





享保十八年 癸丑 大工 林兵庫 秋山口八
 二月吉祥日 同 永井至清

2. 須弥壇裏の墨書 (資料②)



享保十八年 癸丑
 五月

寄進は 岡部内記 金三両貳分
 岡部内記の室 (妻) 金壹分寄進
 取次 当村名主 茂木六兵衛

3. 天井の梁の墨書 (資料③)

享保十八

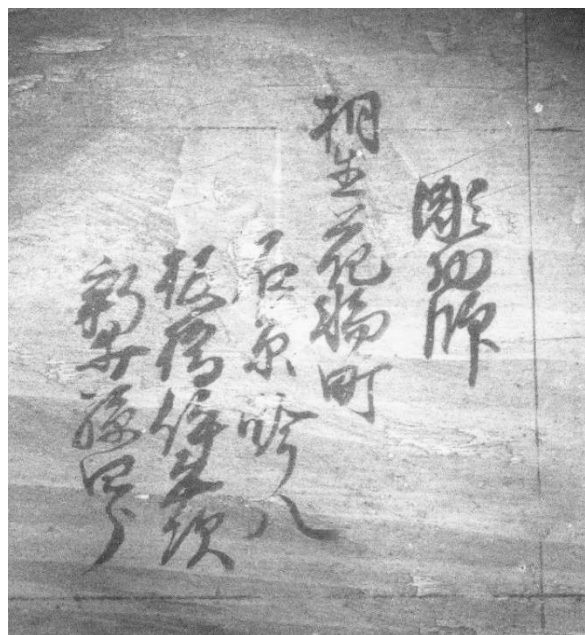
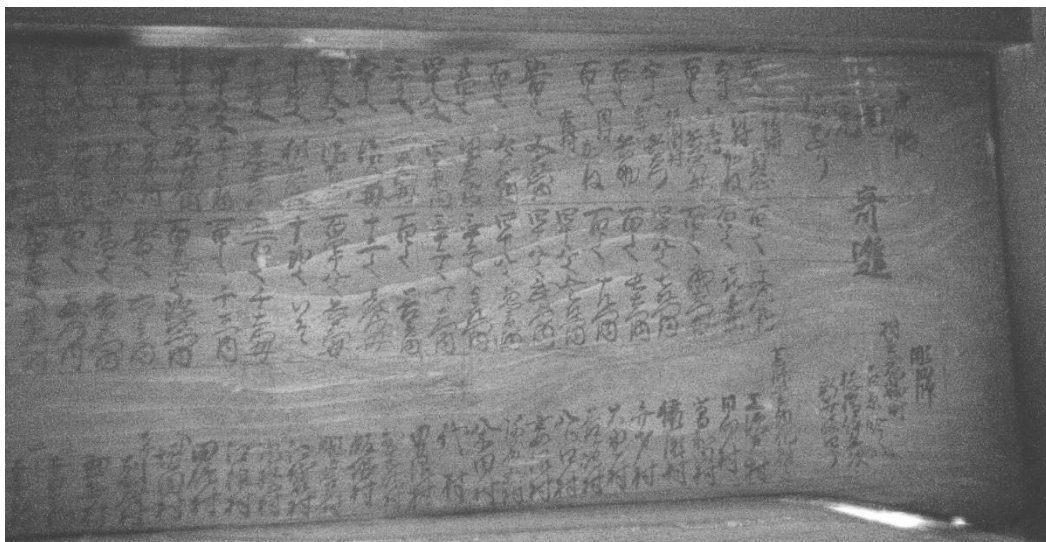
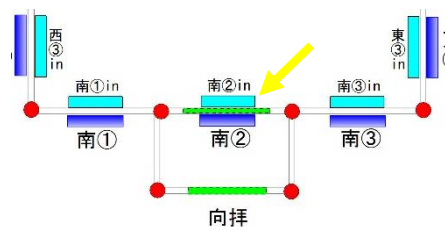
秋山□□

大久保清八



4. 正面扉の上部に打ち付けられた板（資料④）

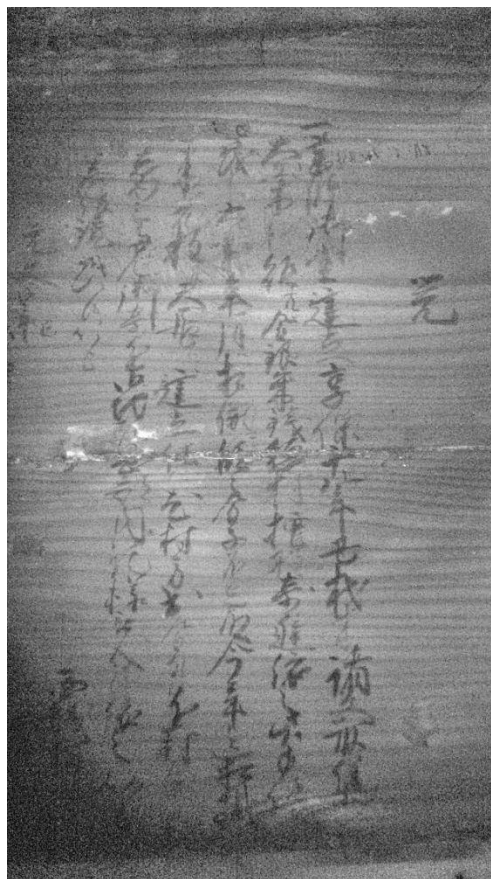
寄進者の名前が列記されており、
右下に 彫物師三名の名前があります。



「彫物師
桐生花輪町
石原吟八
板橋伊平次
新井孫四郎」

5. 格天井の墨書 (資料⑤)

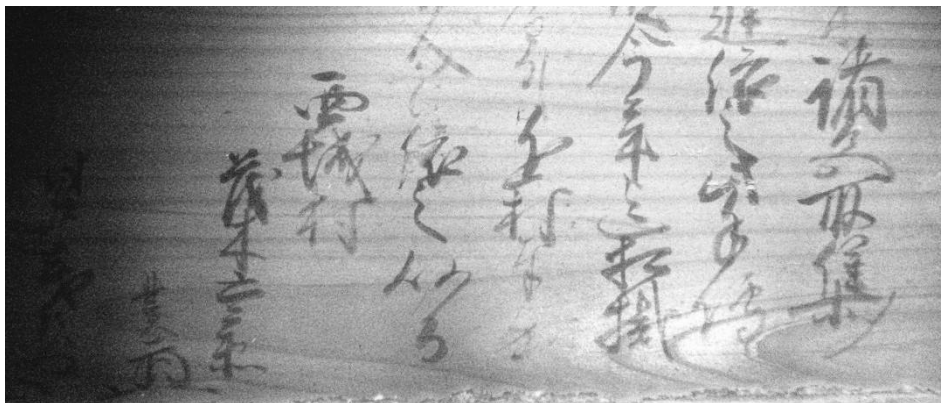
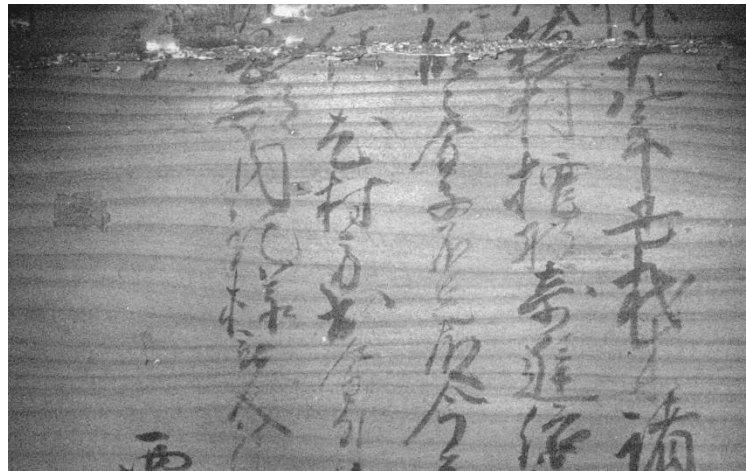
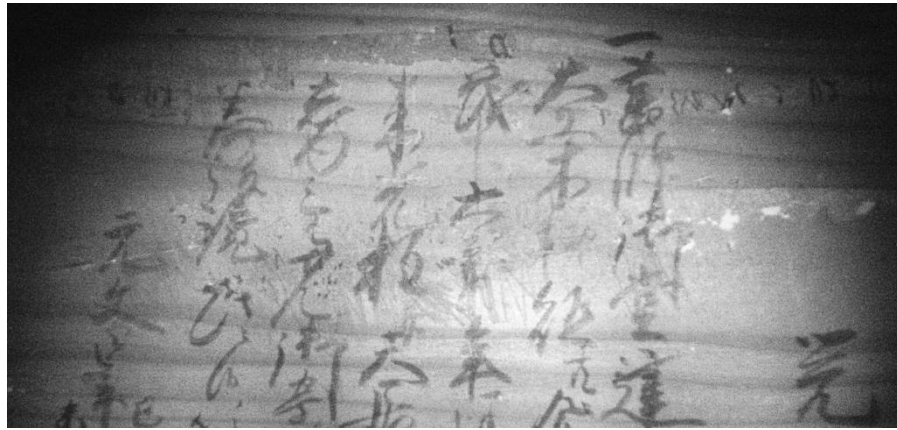
薬師堂中央 (護摩壇の上部) の一枚の板 (60cm 辺) に墨書があります。



覚
 一薬師御堂建立、享保十八年丑材木諸□取集
 大工木挽賄共金銀米錢惣村檀那寄進依之此手伝
 茂木六兵衛年月相働段々金子不足故今年迄相掛
 来光柱并宮居共二建立仕尤村方出金外近村奉伽
 志向之□御寄進御地頭岡部内記様被成候依之仍而
 為後鏡如此二候以上

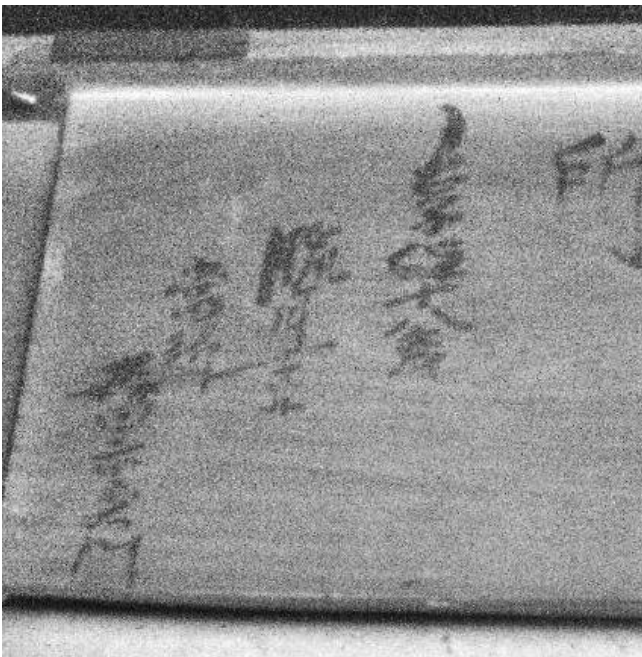
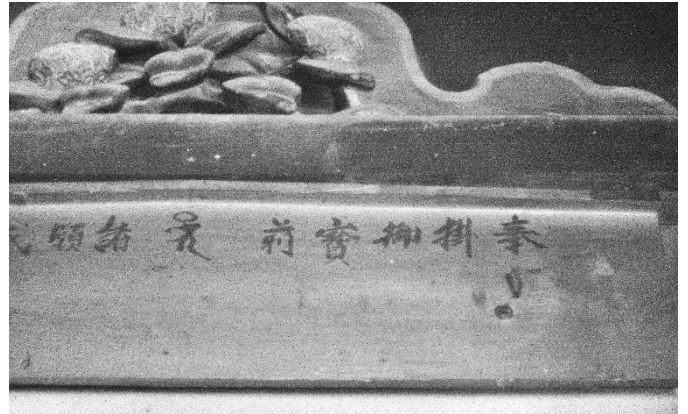
西城村
 茂木六兵衛
 □正 (花押)
 同名義左衛門 (花押)

元文四年己未三月佳日
 大工妻沼村工 兵庫
 彫物屋江戸紺屋町 吟八
 鋸 (誤字か) 屋江戸九間 (軒) 町三十郎



*元文四年は享保十八年の六年後になります。

6. 堂内 左後方壁の板（資料⑥） 墓股（北①in の下部）



享保十八年
臘月（ろうげつ）十二月 吉日
当所
森田重右衛門
（または 六郎右衛門）

V. 考察

1. 建造年

資料①、③、⑤から享保十八年（1733）に上棟し、6年後の元文四年（1739）に完成しました。

資料②、⑤から須弥壇と宮殿も同じ享保十八年に作られました。

資料⑥は、森田氏が上棟の同年に何かを奉納した記念の板書と思われます。

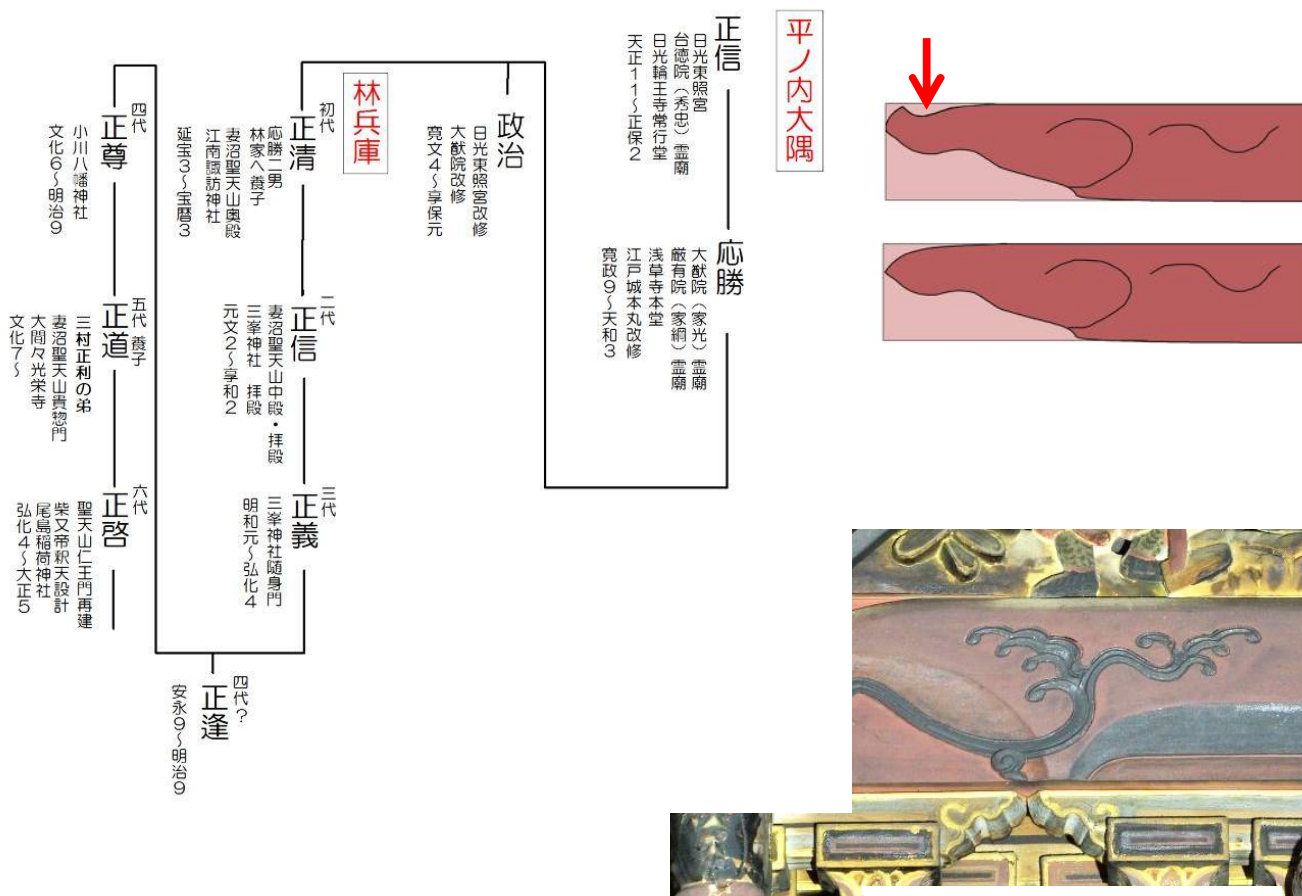
地元、西城村名主の茂木六兵衛が取りまとめ役であったと考えられます。

完成した元文四年（1739）は、寛保の大洪水（1742）の3年前であり、この薬師堂はその洪水被害から難を逃れたと思われます。

2. 大工について

資料①、⑤から棟梁は林兵庫になります。享保十八年から初代 正清と考えられます。正清は、延宝三年（1675）に平ノ内応勝の二男として出生し、林家に養子に入り宝暦三年（1753）に亡くなっています。（北関東宮彫研究会会報 029 号参照）

彼の特徴的な意匠として、虹梁の端（鯖尻）が上に跳ねかえらせる点（矢印）があります。その、特徴は、薬師堂の外部（正面虹梁、海老虹梁他）に見られます。須弥壇の上の宮殿にもその特徴は見られ、この宮殿も薬師堂建立に関わった林兵庫ら大工と彫工が関わっていると考えられます。



薬師堂 宮殿の唐破風の虹梁

薬師堂外部の「鯖尻の跳ね返り」



林兵庫の部下ですが、資料①(棟札)の秋山口八が副棟梁格ではなかったかと思われます。史料③(天井裏梁)の大久保清八ですが、後の時代に嵯峨神社(寛保三年 1743、北関東宮彫研究会会報 010 号)、青蓮寺の須弥壇(延享二年 1745、同会報 009 号)、江南諏訪神社(延享三年、同会報 004 号)で、正清の一番弟子として内田清八という人物がいます。この清八が内田姓になる前は大久保姓であった可能性があります。

・妻沼聖天堂との関係

聖天堂の奥殿は 享保二十年(1735)に林兵庫正清を棟梁として起工し、途中 寛保の洪水(1742)で中断し、宝暦五年(1755)に正清の息子の二代林兵庫正信によって工事が再開され、宝暦十年(1760)に竣工しています。

聖天堂の工事は、前期(享保二十年～寛保二年)、後期(宝暦五年～同十年)と分かれますが、薬師堂はこの前期工事よりも二年早く起工し、聖天堂の前期工事と並行して林兵庫正清が行っていたことがわかります。正清はトップですが、薬師堂は秋山口八に、聖天堂は息子の正信に現場の指揮を任せていたのではないかと思います。薬師堂は金銭的な問題もありましたが、聖天堂の前期工事の最中に竣工されました。

3. 彫工について

資料④、⑤から彫工のトップは、石原吟八がつとめ、その下で同じ花輪の板橋伊平次と新井孫四郎が働いたことがわかります。

石原吟八ら3人は、幕府の御用彫工をつとめた高松亦八の弟子になります。資料④から三名の序列ですが、吟八、伊平次、孫四郎になると考えられます。

吟八と伊平次は、年代は不明ですが桐生の長泉寺の欄間を手掛けています（同会報 018号）。欄間の裏には吟八、伊平次の順になっており一致します。孫四郎は、宝暦七年（1757）に吟八とともに高崎の八幡八幡宮に関わっていますが（『群馬の社寺彫刻』26P）、元の出典は確認できておりません。宝暦七年以降、吟八の名は出てきませんのでこの後位に亡くなったと考えられます。

板橋伊平次は、寛延四年（1751）に館林の常楽寺の須弥壇を手掛けています（同会報 025号）。新井孫四郎は、薬師堂起工の前年の享保十七年（1732）に成田の清滝権現堂に関わっています。成田の仕事と同時期に薬師堂の仕事に参加しております。薬師堂の後の仕事として、寛延三年（1750）に榛東の柳沢寺山門の工事に参加しています（同会報 033号）。

妻沼聖天堂の工事が中断した期間に、嵯峨神社本殿（現・みどり市）を林兵庫が棟梁を手掛けており、その獅子の木鼻は吟八の作風と考えられ（同会報 010号）、兵庫と一緒に参加したと考えられます。吟八と林兵庫家の関係はととても深いとかんがえられ、吟八以降の花輪の彫工を重用しています。

妻沼の聖天堂の前期工事（享保二十年～寛保二年）には、薬師堂建立に関わった吟八、伊平次、孫四郎も参加したと考えられます。聖天堂の後期工事が始まった宝暦五年（1755）以降の、三名の活躍では、吟八と孫四郎の宝暦七年の高崎八幡八幡宮のみ（実際はその弟子らの仕事か？）であり、聖天堂の後期工事は、薬師堂の彫工3名の次の世代が活躍したと思われる。後記工事の彫工として関口文治郎の名が挙げられることが多いですが、文治郎は群馬の中、北部や長野の伊那での活躍が目立ちますが、埼玉周辺は少なく、埼玉は主に前原藤次郎が活躍しており、後期工事の筆頭は藤次郎、その次に深沢軍八郎、そして文治郎が挙げられるかと思えます。

以下の表にまとめました。

西暦	和暦		長慶寺 薬師堂	妻沼 聖天堂	林 兵庫正清	石原吟八	板橋伊平次	新井孫四郎
1731	享保16	辛亥						
1732	享保17	壬子						成田 清滝権現堂
1733	享保18	癸丑	起工					
1734	享保19	甲寅						
1735	享保20	乙卯		前期工事				
1736	享保21	丙辰						
	元文 1							
1737	元文 2	丁巳						
1738	元文 3	戊午						
1739	元文 4	己未	竣工					
1740	元文 5	庚申						
1741	元文 6	辛酉						
	寛保 1							
1742	寛保 2	壬戌						
1743	寛保 3	癸亥				嵯峨神社本殿		
1744	寛保 4	甲子						
	延享 1							
1745	延享 2	乙丑				青蓮寺の須弥壇		
1746	延享 3	丙寅				江南諏訪神社		
1747	延享 4	丁卯						
1748	延享 5	戊辰						
	寛延 1							
1749	寛延 2	己巳						
1750	寛延 3	庚午						
1751	寛延 4	辛未					常楽寺須弥壇	
	宝暦 1							
1752	宝暦 2	壬申						
1753	宝暦 3	癸酉				林兵庫正清 没		
1754	宝暦 4	甲戌						
1755	宝暦 5	乙亥		後期工事				
1756	宝暦 6	丙子						
1757	宝暦 7	丁丑				八幡八幡宮		八幡八幡宮
1758	宝暦 8	戊寅						
1759	宝暦 9	己卯						
1760	宝暦10	庚辰		竣工				
1761	宝暦11	辛巳						
1762	宝暦12	壬午						

4. 彫物の題材、作風について

吟八ら3名が関わっているため、どのパーツを担当したかを特定することは難しいが、他の寺社の彫物を比較検討してみます。

1) 龍について

- ・薬師堂正面 扉上部の羽目



- ・薬師堂 母屋の髹股



- ・吉祥寺（深谷市）の須弥壇（享保 18:1733、会報 003 号）・・・吟八作とされています。薬師堂扉上の龍とは似ています。髹股は比較が難しいと思います。



- ・青蓮寺（桐生市）の欄間 延享元年（1744） 会報 009 号。吟八の基準作
顔の構造は似ております。



- ・常楽寺（館林市）の欄間、延享四年（1751）頃—板橋伊平次、同会報 026 号薬師堂の扉上部の龍とは異なる印象です。



2) 獅子について

北関東宮彫研究会の会報 021 号で紹介しましたが、獅子は個性が出やすい題材です



- ・みどり市東支所（花輪）に保管されている獅子

制作年、彫工：不明



- ・正福寺本堂向拝（群馬県みどり市）本堂の向拝部 彫工：不明



- ・穴原薬師堂（群馬県みどり市） 享保十五年（1730）建造（棟札）



→これら（吟八推定作）に、薬師堂の物は似ている印象です。

- ・成田山新勝寺（千葉県） 清滝権現堂 享保十七（1733） 新井孫四郎
異なる印象はあります。



2) 墓股の十二支について

宝永元年（1704）に桐生の鳳仙寺の山門が作られています。彫工は不明ですが、地理的要素、時代を考慮しますと吟八の作が疑われます。そちらと薬師堂の墓股を並べます。

左：鳳仙寺

右：薬師堂







十二支と一緒に題材が共通するものは
子（米俵）、丑（芙蓉）、寅（竹）、卯（波）、辰（瑞雲）、巳（蓮）、午（蒲公英）、亥（大和松）。

一部が共通は、申（桃）

異なるもの、未、酉、戌 となっています。

戌、辰が異なる要素が強く、鳳仙寺の墓股とは違う彫工の印象です。